

## 看護継続教育における OSCE の現状に関する文献検討

滝下幸栄、岩脇陽子、山本容子、松岡知子

京都府立医科大学医学部看護学科

### Literature Review of the Current Status of Objective Structured Clinical Examinations in Continuing Nursing Education

Yukie Takishita, Yoko Iwawaki, Yoko Yamamoto, Tomoko Matuoka

School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine

#### 要約

わが国の看護継続教育における OSCE の現状を明らかにすることを目的に、10 文献の検討を行った。その結果、継続教育では、様々な教育実践の評価ツール、看護実践能力評価基準の信頼性テストとして OSCE が実施されていることが明らかとなった。

OSCE 導入の目的は、「看護実践能力の測定」を目的とした教育評価システムとしての機能とシミュレーションシナリオや OSCE 評価基準を用いての授業展開、教材提供を目的とした学習支援プログラムとしての機能の 2 つであった。OSCE 課題は、救命・救急、急変時の対応を設定しているものが多かった。OSCE 導入による成果は、技術習熟の推移を見ることができることや教育機会が設定できること、OSCE を受験すること自体が学習の強化につながるという見解が見られていた。OSCE 実践上の課題は、OSCE 運営における人的、物的負担と OSCE シナリオの充実、OSCE 評価に適した項目選別の必要性について言及されていた。

以上から、OSCE は臨床における実践能力の有効な評価手法、教育方法として導入されていることが明らかとなった。一方で、基礎教育と共通する OSCE 運営の課題も明らかとなった。

キーワード：OSCE 看護継続教育 看護実践能力 教育評価

#### 1. はじめに

高度医療の進展、保健医療福祉サービスの多様化、国民の医療への意識の高まりを背景に看護職者に求められる役割や能力は多くなっている。一方で、看護基礎教育と臨床現場で求められる看護実践能力の乖離が叫ばれて久しい。そのような中、基礎教育カリキュラムの改正や新人看護職員の卒後臨床研修の努力義務化など、その乖離を埋める試みが展開されてきた。

看護実践能力の育成は、看護が実践の科学である限り自明の課題であるが、その能力をアウトカムとして把握することは難しい。看護実践能力は、知識や技術、判断力、倫理観などが統合された力として位置づけられ、その評価には重層的で多面的な手法が必要とされている。そのような中、看護実践能力の中でも「観察できる」能力の評価ツールとして OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) が注目され、看護基礎教育の分野でそのナレッジが蓄積されてきた<sup>1) 2) 3)</sup>。一方、基礎教育終了後に臨床の

場で展開される現任教育である看護継続教育の分野においても OSCE の有用性が着目されている<sup>4)</sup>が、臨床における OSCE の現状については、明らかにされていない。そこで、本研究では、わが国の看護継続教育における OSCE に焦点をあて、その内容と活用の現状を明らかにする。

#### 2. 方法

##### 1) 文献の選定

2017 年 7 月に Web 版医学中央雑誌 Ver.5 を用い、キーワードを「OSCE (客観的臨床能力試験)」として、看護文献を検索した。検索期間は小西<sup>5)</sup>の先行研究を参考に、日本において OSCE トライアルが始まった 2000 年～2017 年とした。その結果、390 件の文献が検出された。

そのうち、看護継続教育における OSCE の実践に焦点を当てるために、看護基礎教育に関連した文献を除外したところ、37 件の文献が抽出された。その後、会

議録と解説を除き、原著論文を中心に文献内容を精査した。修士課程学生を対象にしたものや基礎教育から卒業後まで継続的に評価した論文を除き、病院等の施設内において臨床看護実践を行う看護師を対象として OSCE を行い、その取り組みが明確に記述されている 10 文献を分析対象とした。

## 2) 分析方法

分析対象文献をタイトル、研究目的、調査対象者、人数、調査方法の項目において分類整理した後、小西<sup>5)</sup>の OSCE 文献レビューの枠組み (OSCE の実際、OSCE の効果、研究対象者の反応、研究課題) を参考に、リサーチクエスチョンを、看護継続教育において、「OSCE はどのような目的で導入されているのか」、「どのように運用されているのか」、「どのような成果があるのか」におき、文献から内容を抽出し分類した。

## 3. 結果

### 1) 分析対象文献の概要

表 1 に分析対象論文の発行年、タイトル、研究目的、調査対象、調査方法の概要を示した。

研究目的は、シミュレーション研修の学習効果の把握が 3 件、看護・医療技術教育の学習効果の把握が 5 件、助産師の実践能力評価基準の開発が 1 件、OSCE 受験の効果をはっきりとするものが 1 件であった。調査対象は、すべて病院に勤務する医療従事者であり、新人看護師を対象としたものが 2 件であった。看護師のほかに准看護師、助産師、医師を対象にしたものもみ

られた。調査方法は質問紙による調査 4 件、インタビュー 2 件、OSCE を中心としたテスト法が 6 件であった。

### 2) OSCE 導入の目的と成果

各研究における OSCE を導入した目的と具体的な運用、OSCE 設定課題、OSCE 導入による成果、OSCE 実践上の課題を表 2 に示した。

研究あるいは教育に OSCE を実施した目的は、教育項目である医療・看護技術の習得レベルの評価、並びにシミュレーション学習の習熟度を評価することにおいていたものが 9 件であった。評価の時期は、診断的評価、形成的評価、統括的評価のそれぞれの段階で実施されていた。また、OSCE シナリオをベースにしたシミュレーション演習の展開など、学習支援プログラムとして OSCE を導入していたものが 4 件であった。他には、助産実践能力評価表の信頼性と妥当性の検証のために OSCE を行っているものがあった。

次に、OSCE の具体的な運用であるが、OSCE 形式でシミュレーション演習をした後、OSCE による個別評価を行うもの<sup>6)</sup>、シミュレーション演習の前後で OSCE を行うもの<sup>7)</sup>、技術演習後、自己学習の時間を設けたのち、OSCE 評価を行うもの<sup>8)</sup>、BLS (Basic Life Support: 一次救命処置) 研修の直後と 12 カ月後、24 カ月後に OSCE を行い、能力の推移を見るもの<sup>9)</sup>、OSCE 形式のシミュレーションのみ行うもの<sup>10) 11)</sup> など様々であった。

表 1 分析対象論文の概要

文献番号	著者 (発行年)	タイトル	研究目的	調査対象・人数	調査方法
1	北林千紗他 (2017)	一般病棟看護師に対する気管内挿管介助シミュレーション研修の効果	気管内挿管介助シミュレーション研修の学習効果を明らかにする	経験1年～5年の看護師 8名	OSCEによるテスト法 質問紙調査
2	石川幸司他 (2015)	フィジカルアセスメント能力を向上させるシミュレーション学習の効果 準実験研究による分析	フィジカルアセスメント能力を向上させる学習方法としてシミュレーション学習が有効か検討する	経験2年目の看護師 11名	OSCEによるテスト法 インタビュー
3	小松順子他 (2014)	新人看護師への看護部OSCEの実施と評価	新人看護師へのOSCEによる学習効果を明らかにする	新人看護師 57名 経験2年目看護師 25名	質問紙調査
4	上利美絵 (2013)	OSCEを用いた急変時シミュレーション学習の効果	急変場面を想定したシミュレーション演習の学習効果を明らかにする	心臓血管センターに勤務する経験3年目以下の看護師 9名	OSCEによるテスト法
5	中村美央他 (2013)	感染管理ベストプラクティス「標準採血法」による技術演習の評価と課題	採血法に関する技術演習の学習効果を明らかにする	新人看護師46名 新人臨床研修医18名	質問紙調査
6	松永佳子他 (2012)	助産外来における助産師の実践能力評価基準の開発—客観的臨床能力試験OSCEを活用して	助産外来におけるOSCEを用いた助産実践能力評価基準を開発する	経験5年以上の助産師 4名～9名	フォーカスグループインタビュー
7	増山純二 (2008)	病院内におけるBLS教育 看護師の教育を通して	BLSの効果的な教育方法を明らかにする	病院勤務看護師 50～77名	テスト法
8	浦部蒼子他 (2005)	看護部のACLS教育にOSCEを導入しての評価 第一報 OSCEを用いたACLSスキル到達度の評価	OSCEを用いたACLS教育の学習効果を明らかにする。	病院勤務看護師・准看護師 197名	OSCEによるテスト法
9	伴佳子他 (2005)	看護部のACLS教育にOSCEを導入しての評価 第二報 受験者によるOSCE評価	OSCE受験者が自覚するOSCEの学習効果を明らかにする	病院勤務看護師・准看護師 197名	質問紙調査
10	児玉貴光他 (2002)	当院における救急医療講座の教育効果に関する検討	OSCEを取り入れたACLS講義の学習効果を明らかにする	医師 10名 看護師 7名	テスト法

表2 各研究におけるOSCE導入の目的・具体的運用と効果

文献番号	OSCEを導入した目的	OSCEの運用方法	OSCE設定課題	OSCE導入による効果	OSCEの課題
1	・OSCEシナリオを元にした気管内挿管シミュレーション演習の実施 ・演習を複数回行いOSCE評価点の推移を把握	気管内挿管介助シミュレーション演習を実施→救急専門医による挿管に関する講義とデモンストレーションを受講→同一シナリオでシミュレーション演習を実施、その場を動画にとり、OSCE評価→同一シナリオで再度シミュレーション演習、OSCE評価	呼吸器疾患患者の巡視時の心肺停止、BLS後の気管内挿管介助	OSCE評価点の推移把握により、シミュレーション研修の学習効果と効果的な教育方法について明らかとなった。	
2	シミュレーション学習の効果を明らかにするためにフィジカルアセスメント能力の評価法としてOSCEを使用	フィジカルアセスメントと急性心不全の講義→プログラム開始時OSCE→シミュレーション学習4回→プログラム終了時OSCE	肺うっ血がある急性心不全患者のフィジカルアセスメント	OSCE得点率の把握により、シミュレーション学習はフィジカルアセスメント能力の向上に寄与していることが示唆された。	
3	・新人看護師の実技演習時の技術習熟度の統括評価のために導入 ・教材（実技演習シナリオとDVD）はOSCE課題シナリオ	OSCE課題に沿った実技演習シナリオとDVDの作成→OSCEテキストと評価表作成→OSCE課題に沿った実技演習→自己学習→OSCE	1. 標準採血法 2. 薬剤調整 3. 点滴静脈内注射	・OSCE受験者の自己評価得点ではOSCE後はOSCE前に比べて、全ての技術で得点が上昇した。 ・OSCE実施群は、未実施群に比べて、実技演習後6か月後の手順遵守率が高かった。	OSCEによる評価が効果的な看護業務を明らかにする必要。 OSCEによる病棟への負担軽減
4	・急変時対応シミュレーション演習時の形成的評価法として使用 ・教材としてのOSCEシナリオ	OSCEシナリオと評価表の作成→OSCEの手法を用いたシミュレーション演習（1人10分）を2回受講	1. 夜勤帯の虚血性心疾患の胸痛時の対応 2. 夜勤帯の慢性心不全の急性増悪への対応	・シミュレーション演習の学習効果と効果的な教育方法が明らかとなった。 ・知識、技術、態度を評価できた。	多様な状況設定シナリオの必要性
5	採血法の技術習得における統括評価として導入	DVD視聴、技術演習→5日間の自己学習→看護師のみOSCE	標準採血法	OSCEを受験した者は、受験しなかった者に比べて採血法の手順遵守率が高かった。	
6	助産外来における助産実践能力評価表の信頼性・妥当性検討のためのトライアルOSCEとして実施	3種のシナリオによるステーション（各30分）でのOSCE	1. 妊娠初期（つわりがひどい）の妊婦健診 2. 妊娠中期（おりものが多い）の妊婦健診 3. 妊娠末期（腹部緊張）の妊婦健診	OSCEの実施とその後の検討により、助産師の実践能力評価基準の開発ができた。	場所、時間の確保が課題。
7	BLS教育後の技術習得レベルの評価	BLS研修→OSCE→6か月後フォローアップ研修→12か月後OSCE→24か月後OSCE	成人のBLS	OSCE評価点の推移把握により、BLSフォローアップ研修とOSCE前の自己学習の効果が明らかとなった	
8	看護師のACLSスキル習得レベルの評価	筆記試験→OSCE評価表を基にした事前学習→ミニレクチャー→OSCE（20分）→基準に満たない時は再教育	心肺停止患者の第一発見者としてBLSを行なった後、蘇生チームリーダーとしてACLSを実施	受験者のスキル習得レベルとBLSとACLSの評価項目ごとの習得レベルが明らかとなり、教育内容の検討につながった。	
9	看護師のACLSスキル習得レベルの評価	筆記試験→OSCE評価表を基にした事前学習→ミニレクチャー→OSCE（20分）→基準に満たない時は再教育	心肺停止患者の第一発見者としてBLSを行なった後、蘇生チームリーダーとしてACLSを実施	OSCE受験者はOSCEは必要であり、自己のスキル到達度の評価ができることに加え、スキル向上につながっているとしていた。	トレーニング環境の整備が必要
10	ACLS教育の一環としてOSCE形式のシミュレーション演習を実施	プレテスト→講義→シミュレーション、OSCE→ポストテスト	成人のACLS	ポストテストの結果が上昇したことから、臨床の現場を想定したOSCEを取り入れた教育方法は有効な方法であることが示唆された。	

OSCE の設定課題であるが、BLS、ACLS（Advanced Cardiac Life Support: 二次救命処置）、気管内挿管介助、心疾患患者の急変時の対応、急性心不全患者のフィジカルアセスメントなど救命救急時の対応課題が7件であった。他には、採血法、薬剤調整、点滴静脈内注射など、治療援助技術に関連した課題が2件、助産技術に関連した課題が1件であった。

OSCE 導入の成果では、OSCE 評価点の推移からシミュレーション研修の学習効果と有効な教育方法が明らかとなったとするもの<sup>6) 10)</sup>、OSCE 得点率からシミュレーション教育の有効性を確認できたとするもの<sup>7)</sup>、

OSCE 受験者は未受験者に比べ看護技術の習得レベルが高いこと<sup>8) 12)</sup>、OSCE により実践能力評価基準の開発が出来たとするもの<sup>13)</sup>、OSCE により看護技術の項目ごとの習得レベルが明らかとなり、学習内容の検討につながったとするもの<sup>14)</sup>、OSCE 受験者は、OSCE の効果を肯定的に評価している<sup>15)</sup> ことなどが記述されていた。

最後に OSCE の実践上の課題では、OSCE の負担軽減や場所や時間の確保の必要性、トレーニング環境の整備や OSCE 評価の対象となる看護業務選択の必要性など、4 件の文献で記述されていた。

## 考察

### 1. 看護継続教育における OSCE の目的と内容

看護教育における OSCE の取り組みは、基礎教育に関連したものが多く、卒後教育、継続教育に関する報告は少なく、会議録、解説等に分類される内容が中心であった。本論文では、大学院教育を除き、病院等の施設内において臨床看護実践を行う看護師を対象とした OSCE 実践を分析対象とした。いくつかの原著論文から継続教育における OSCE への意欲的な取り組みをうかがうことができた。

今回の分析では、教育を展開する上での OSCE そのものの有用性を明らかにする研究は 1 件であった。他は、様々な教育実践の評価ツール、あるいは看護実践能力評価基準の信頼性テストとして OSCE が実施されていた。OSCE の価値については、1990 年代からはじまる医学教育分野における議論ですでに確立している。それを受けて、実践的な取り組みが展開されていると考えられる。

OSCE 導入の目的は、「看護実践能力の測定」を目的とした教育評価システムとしての機能と、シミュレーションシナリオや OSCE 評価基準を用いての授業展開、教材提供を目的とした学習支援プログラムとしての機能の二様であった。この点に関して、基礎教育と比較してその特徴を見てみると幾つかの傾向をうかがうことができる。

基礎教育における OSCE の活用目的に関して梶原ら<sup>16)</sup>は、「臨床能力測定」と「対象の理解と技術の根拠の確認」、「看護実践能力の主体的習得」の 3 点にまとめている。「臨床能力測定」とは、文字通り、看護実践能力の評価であり、「対象の理解と技術の根拠の確認」とは、患者を始めとした看護の対象者を学生はどのように理解し、どのような判断で看護を提供していたかの把握である。そして、「看護実践能力の主体的習得」とは、OSCE 受験前の自己学習や OSCE 後の評価者フィードバックを通しての自己課題の確認が看護実践能力を伸張させるとするものである。

基礎教育における OSCE は学年末や実習前後などに、認知、精神運動、情意の各領域の評価を含めた統括評価として実施されている。そのため、OSCE 設定課題は、幾つかの看護技術を組み合わせた（例えば、排泄援助とコミュニケーション、アンギオ後のシーツ交換など）状況依存型のものが中心となっている<sup>17) 18)</sup>。一方で、継続教育では、BLS や採血法など明確な技術項目の到達度評価が中心であった。基礎教育では対象の理解の程度と臨床判断のプロセスが見える形での OSCE が目

指されているが、継続教育では医学教育と同様に、技術・スキルベースの習熟度を把握するものとして活用されている様子がうかがえる。

OSCE 設定課題は、救命・救急、急変時の対応を設定している報告が多かった。救急時の OSCE は、医学教育における共用試験 OSCE や Advanced OSCE などで実践知が多く蓄積されている分野である<sup>19)</sup>。教育内容や OSCE 評価基準なども明快に提供されている。継続教育における基本的学習項目として OSCE を通じた教育と評価が行われているのではないかと考える。

看護実践能力の主体的習得に関しては、継続教育における OSCE 導入の成果として、OSCE 受験者は当該技術の習熟度が高かったこと、その技術が長く保たれたことは報告されているが、OSCE を通じて看護職者の学習態度にどのような影響を及ぼしたかについては言及されていなかった。

次に、学習支援プログラムとしての OSCE の機能であるが、OSCE そのものがケースシナリオを基本においた系統的評価基準を提供するものであることから、シミュレーション教育に非常に馴染むものである。また、OSCE の評価視点は教育内容分類に類似するものであるから、教材として使用しやすい面を持つ。継続教育では OSCE の評価機能ではなく、教育機能のみを使つての取り組みも報告されていた。これは基礎教育での OSCE には見られない傾向であり、臨床におけるシミュレーション教育の教育方法を支援するものとして OSCE が期待されていることがうかがえる。

### 2. 看護継続教育における OSCE の成果と課題

OSCE 導入による成果は、OSCE を繰り返す行う中で、技術習熟の推移を見ることができることや教育機会が設定できている様子がうかがえる。また、先に述べたように、OSCE を受験すること自体が学習の強化につながっているとする肯定的な見解も見られていた。

OSCE 実践上の課題は、OSCE 運営における人的、物的負担と OSCE シナリオの充実、OSCE 評価に適した項目選別の必要性について言及されていた。これは、基礎教育における OSCE 導入の阻害要因<sup>20)</sup>と類似する内容であった。

以上、継続教育における OSCE の実践状況を見てきた。基礎教育において、看護実践能力という複合的で多重的な能力の評価手法として発展してきたように、継続教育においても、臨床における実践能力の有効な評価手法、教育方法として導入されている様子が明らかとなった。一方で、基礎教育と共通する OSCE 運営

の課題も明らかとなった。継続教育における OSCE の進展は、臨床にいる看護職者の看護実践能力の向上に直接的につながるものと考えられる。継続教育に適した OSCE 設計について、今後検討すべき事項であると考えられる。

## 5. 結論

わが国の看護継続教育における OSCE の現状を明らかにすることを目的に 10 文献の検討を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 継続教育では、様々な教育実践の評価ツール、看護実践能力評価基準の信頼性テストとして OSCE が実施されている。
2. OSCE 導入の目的は、「看護実践能力の測定」を目的とした教育評価システムとしての機能とシミュレーションシナリオや OSCE 評価基準を用いた授業展開、教材提供を目的とした学習支援プログラムとしての機能の 2 つである。
3. OSCE 課題は、救命・救急、急変時の対応を設定しているものが多い。
4. OSCE 導入による成果は、技術習熟の推移を見ることができることや教育機会が設定できていること、OSCE を受験すること自体が学習の強化につながっていると認めるものであった。
5. OSCE 実践上の課題は、OSCE 運営における人的、物的負担と OSCE シナリオの充実、OSCE 評価に適した項目選別の必要性についてであった。

以上から、OSCE は臨床における実践能力の有効な評価手法、教育方法として導入されていることが明らかとなった。一方で、基礎教育と共通する OSCE 運営の課題があることも明らかとなった。

## 6. 引用文献

- 1) 滝下幸栄, 山本容子, 山縣恵美他 (2012): 看護基礎教育における OSCE の効果と課題 学士課程 4 年生への質問紙調査から, 京都府立医科大学看護学科紀要, 22, 95-102.
- 2) 山本容子, 山縣恵美, 滝下幸栄他 (2011): 看護学士課程 4 年生の看護実践能力の現状と看護基礎教育における OSCE の意義, 京都府立医科大学看護学科紀要, 21, 127-136.
- 3) 高尾憲司, 山本容子, 滝下幸栄他 (2011): 学士課程 4 年生に対する OSCE 運営方法と今後の課題, 京都府立医科大学看護学科紀要, 21, 145-150.
- 4) 橋元春美, 倉ヶ市絵美佳, 大川智美他 (2010): 小児看護の基礎教育と新人研修の活性化と実質化のために一人前看護師育成プログラムにおける OSCE, 小児看護 35(11), 1528-1533.
- 5) 小西美里 (2013): 日本の看護教育における OSCE の現状と課題に関する文献レビュー, 上武大学看護学部紀要, 8(1), 1-8.
- 6) 北林千紗, 西田麻子, 太田翔子他 (2017): 一般病棟看護師に対する気管内挿管介助シミュレーション研修の効果, 日本看護学会論文集 看護教育, 47, 195-198.
- 7) 石川幸司, 中村恵子, 菅原美樹 (2015): フィジカルアセスメント能力を向上させるシミュレーション学習の効果 準実験研究による分析, 日本救急看護学会雑誌, 17(2), 45-55.
- 8) 小松順子, 白川秀子, 小川敦子他 (2014): 新人看護師への看護部 OSCE の実施と評価, 日本医療マネジメント学会誌, 15(3), 193-196.
- 9) 増山純二 (2008): 病院内における BLS 教育 看護師の教育を通して, 蘇生, 27(1), 45-49.
- 10) 上利美絵 (2013): OSCE を用いた急変時シミュレーション学習の効果, 日本看護学会論文集 成人看護 I, 43, 111-114.
- 11) 児玉貴光, 谷口淳朗 (2003): 看護師の ACLS 学習, 石川県立中央病院医学誌, 25, 51-53.
- 12) 中村美央, 小松順子, 佐々木典子他 (2013): 感染管理ベストプラクティス「標準採血法」による技術演習の評価と課題, 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要, 21(2), 139-144.
- 13) 松永佳子, 山崎圭子, 遠山珠未他 (2012): 助産外来における助産師の実践能力評価基準の開発 客観的臨床能力試験 OSCE を活用して, 東邦看護学会誌, 9, 9-16.
- 14) 浦部誉子, 伴佳子, 水本真由美 (2006): 看護部の ACLS 教育に OSCE を導入しての評価 (第 1 報) OSCE を用いた ACLS スキル到達度の評価, 日本看護学会論文集 看護管理, 36, 329-331.
- 15) 伴佳子, 浦部誉子, 水本真由美 (2006): 看護部の ACLS 教育に OSCE を導入しての評価 (第 2 報) 受験者による OSCE 評価, 日本看護学会論文集 看護管理, 36, 332-334.
- 16) 梶原理絵, 中西純子 (2011): 看護学士課程における OSCE 活用の現状と課題に関する文献検討, 愛媛県立医療技術大学紀要, 8(1), 35-41.
- 17) 清水裕子, 大学和子, 野中静他 (2002): 基礎看護技術実技試験における SP を導入した OSCE の試み,

聖母女子短期大学紀要, 15, 53-63.

- 18) 内田倫子, 土屋八千代, 赤星成子他 (2008) : 成人看護学における OSCE の試み, 南九州看護研究誌, 6(1), 55-61.
- 19) 大滝純司 (2007) : OSCE の理論と実際, 143-153, 東京 : 篠原出版新社
- 20) 堀込由紀, 及川秀子, 小西美里他 (2015) : 看護基礎教育における OSCE 導入に関する検討 全国看護系大学の OSCE 導入の現状調査, 日本看護学会論文集 看護教育, 45, 47-50.